

前回，ものごと一般について述べる総称文には，次の3つの形式があることを見た．次の文はどれも「ビーバーはダムを作る」というすべてのビーバーの持つ性質について述べた文である．

(1) *Le castor* construit des barrages.

(2) *Les castors* construisent des barrages.

(3) *Un castor* construit des barrages.

前回はこのうち，定冠詞単数 *le castor* と定冠詞複数 *les castors* について話をし，*le castor* は「自然な集合」を，*les castors* は「たまたまできた集合」を表わすという話をした．動物種としての「ビーバー」は自然な集合であるが，たまたまできた集合と見ることもできるので，どちらも総称文になる．今回は残った不定冠詞単数の *un castor* の話である．

使いにくい不定冠詞単数形

un castor は本来「一匹のビーバー」のはずだが，なぜこれが総称文では「すべてのビーバー」を意味するようになるのだろうか．ふつうは次のように説明されている．「世界中のビーバー」の集合をまず考える．広いランドのような所に，ビーバーが山のようにひしめいている場面を想像していただきたい．そこから一匹ビーバーを取り出す．調べた結果，そのビーバーはダムを作る習性があることが確かめられる．次に別の一匹ビーバーを取り出す．するとそのビーバーについても同じことがわかる．この操作を繰り返すのである．最後にはビーバーはみんなダムを作る習性があることが判明する．取り出される一匹のビーバー *un castor* は，仲間すべてを代表するものとみなされる．スポーツ競技会で，選手代表が宣誓して「われわれはスポーツマンシップに則り正々堂々と戦うことを誓います」と言うと，選手全員が誓ったものとみなされるのと同じである．

これがよく耳にする説明なのだが，「世界中のビーバーを一カ所に集めることができるか」とか，「集めたビーバーを全部調べることができるのか」などという疑問を抱く人もいるだろう．私もそんなことは実際にはできないのではないかと思う．上の説明にはどうも腑に落ちない点があるのだが，いちおう認めて話を進める．

総称文を作るときに注意しなくてはならないのは，*le castor* や *les castors* に較べて，*un castor* にはずいぶん制約があり，自由には使えないという点である．たとえば，*abonder* 「たくさん生息する」，*s'éteindre* 「絶滅する」，*se raréfier* 「数が少なくな

る」のような動詞は，un castor を主語として総称文を作ることができない．

(4) *Les castors* abondent dans cette région.

「この地方にはビーバーがたくさん生息している」

(5) *Le castor* abonde dans cette région.

(6) × *Un castor* abonde dans cette région.

この理由はすぐわかる．「たくさん生息する」ということは，ビーバーという動物種全体について言えることで，一匹一匹のビーバーについて言えることではないからである．たしかに分身の術でも使わないかぎり，一匹がたくさん生息するわけにはいかない．このことから，*les castors* や *le castor* は集合または類をさすが，*un castor* は集合をささないことがわかる．あくまで「一匹のビーバー」なのだ．

また，*affectueux* 「情愛が深い」，*populaire* 「人気がある」，*utile* 「便利である」のような表現も不定冠詞単数といっしょには使いにくい．?記号はまったくだめという訳ではないが，かなり不自然な文という意味である．

(7) ? *Un chat* est affectueux.

「猫は情愛が深い」

(8) ? *Un footballeur* est populaire.

「サッカー選手は人気がある」

(9) ? *Un vélo* est utile.

「自転車は便利だ」

(10) *Un chat* a quatre pattes.

「猫には足が4本ある」

よくない(7)(8)(9)とよい(10)はどこがちがうのだろうか．それは次のようなことだと考えられる．「足が4本ある」は，猫のような哺乳動物すべてに当てはまる動物学的特徴であり，時間とともに変化しにくい．こういうものをこむずかしく「内在的特徴」という．一方，「情愛が深い」は飼い主の側から感じられることであり，猫自体に内在しているわけではない．「人気がある」も使う人がいて初めて言えることである．「便利だ」もそうで，自転車も雨や雪の日には便利とは言えないだろう．使う人や状況に左右される．こういうものを「外在的特徴」という．不定冠詞 *un chat* は内在的特徴を述べる文でしかうまくいかないのである．

「～であるべき」を表わす不定冠詞

これとは逆に，不定冠詞がいちばんぴったりする場合もある．食卓で騒いでいる子供を叱るときや，男の子がめそめそ泣いているときは，次のように言うのがよい．

(11) *Un enfant* se tait à table. 「子供は食卓では静かにするものだ」

(12) *Un garçon* ne pleure pas. 「男の子は泣くものじゃない」

これを *Les enfants ...* とか *Les garçons...* とかに変えてしまうと，正しい文ではあるの

だが、「こうであるべき」というニュアンスが消えてしまう。だから叱ったり注意したりするときには使えなくなる。(12)は *Si tu es un garçon, tu ne dois pas pleurer.* 「もしお前が男の子なら、泣いてはいけない」と同じような意味である。だから(12)のいちばんいい日本語訳は、「男の子だったら泣くな」だと思う。

(13) *Un poème se lit à haute voix.* 「詩は声に出して読むものだ」

(14) *?Le poème se lit à haute voix.*

上の例でも *un poème* のほうがよく、*le poème* はややおかしい。*le poème* だと「～するべきだ」というニュアンスが失われるだけではなく、そもそも総称文として変になるようだ。ここには「～するべきだ」という意味にかかわる大事なポイントが潜んでいる。「～するべきだ」という意味の背後には、「もし～するのだったら / ～するときには、～するべきだ」という意味が隠れているような気がする(ほんとうは、教師が「気がする」などと言ってはいけないのだが)。もしそうだとすると、(13)は「一編の詩を読むときには、声に出して読むべきだ」という意味になる。一度に読むことができるのは *un poème* 「一編の詩」であって、詩というジャンル全体 (*le poème*) を一度に読むことはできない。だから(14)は総称文としてはおかしいのだとうまく説明がつく。

(15) *Un chat parvient à retomber de 6m sur ses pattes. Au-delà, il se brise un membre.*

「猫は6mの高さからうまく着地することができる。それ以上だと足を折る」

(15)も *un chat* がいちばんよいケースだが、ここにも「もし落ちたときには」という条件が背後に隠されていると考えられる。

総称にならない *des* と *du*

さて、数えられる名詞の場合、*les chats* / *le chat* / *un chat* は条件は異なるものの、みんな総称の意味になった。冠詞のなかでひとつだけ総称の意味にならないのが *des* である。数えられない名詞のときは *du* がそうである。

(16) × *Des chats* sont carnivores. 「猫は肉食である」

(17) × *Du vin* est bon pour la santé. 「ワインは体によい」

もともと不定冠詞の *des* は *de + les* が縮約したものである。*les chats* は「すべての猫」を表わし、*de* は部分を表わす働きがあったので、できあがった *des* は「すべての猫のなかの何匹か」を意味することになる。ところが総称とはその定義からして、「すべての～」に当てはまることから述べる文である。だから一部分しか表わさない *des* では具合が悪いのである。

さて、長々と総称について話してきたが、フランス語で文章を書いたり話したりするときの実践的アドバイスとしては、次の点に気をつけるとよいだろう。

いちばん使いやすいのは *les* である。 *Les Français aiment le vin.* 「フランス人はワインが好きだ」と言うとき、ワインが嫌いなフランス人がいても大丈夫である。 *Les Français ont voté à gauche.* 「(今度の選挙では)フランス人は左翼に投票した」なら、50%をわずかに超えるフランス人が左翼政党に投票していれば、左翼勝利なのでOKである。 *Les Chinois ont inventé le papier et la poudre.* 「中国人は紙と火薬を発明した」では、実際に発明したのがたった一人の中国人でもかまわないというオドロキだ。 *les* による総称はこのようにアバウトなので使いやすい。ほとんど万能と言ってもよい。だからお勧めするし、日常会話でいちばん使われるのはこれである。

le はそうはいかない。 *le chat* 「猫」、 *le livre pour enfant* 「児童書」のように既成の概念について、他の概念と比較するときに使われるが、書き言葉的で硬い表現になる。日常会話で使うことは少ない。最後に *un* はいちばん使いにくいので、初心者は避けたほうがよいだろう。 *Un garçon* 「男子はすべからく～」のように例外を許さない最も強い総称表現になり、「～すべき」というニュアンスを帯びやすい。このように総称の冠詞も、適材適所の使い方を心がけていただきたい。

(とうごう・ゆうじ)